慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治的リーダーシップの理論
Sub Title	Theory of political leadership
Author	石井, 貫太郎(Ishii, Kantaro)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.3 (2010. 3) ,p.301- 324
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20100328-0301

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治的リーダーシップの理論

石井貫太郎

1　問題の所在
2　第一次的要素による政治的リーダーシップのタイプのモデリング
（1）第一次的要素と第二次的要素
（2）自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定化
（3）自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定化
3　第二次的要素による政治的リーダーシップのスキルのモデリング
（1）第二次的要素としての知性と徳性
（2）政治的リーダーシップの第二次的要素の極大化
（3）制約条件を付加したモデル
4　結論

1　問題の所在

一般に、リーダーシップ（leadership）を分析する視角には、当該リーダーの資質に着目する「資質論的アプ

ローチ（Trait Approach）」と、当該リーダーの行動に着目する「行動論的アプローチ（Behavioral Science Approach）」の二種類がある。[1] 前者は、主として歴史学や政治学の分野で蓄積されてきた研究の成果であり、リーダーシップの本質が当該リーダーの人間的資質にあると考える議論である。また後者は、主として心理学や経営学の分野で蓄積されてきた研究の成果であり、リーダーシップの本質を、当該リーダーの行動やその行動を誘発する要因としての彼もしくは彼女を取り巻く環境的な要素に求める議論である。[2]

従来、双方の研究はそれぞれ独立して発展してきた。したがって、こうした研究動向の背景には、果たしてリーダーシップの本質は資質と行動のいずれか一方であるという二律背反的な前提認識が存在していたといえる。しかし、ある人物の行動の特徴とは、多分にその人物の性格（characteristics）を中心とした資質（trait）に規定されるものである。特に、政治的リーダーのリーダーシップを論ずる際には、それが当該リーダーの統治下にある人々に対するより公式な権力を行使する活動であり、その影響がより直接的に被支配者の生殺与奪に関わる活動であるため、当該リーダーの人間的要素が多分に大きく影響する。[3] したがって、政治的リーダーシップの本質を論ずる研究は、従来の資質論的アプローチと行動論的アプローチの双方を統合する方向で展開されるべきであり、なかんずくそれは、当該リーダーの資質的要素の是非を分析する研究に帰着するものであると考えられる。

以上のような問題意識を前提として、本稿では、第一に、精神分析（Psychoanalysis）や社会心理学（Social Psychology）の分野で開発された「エゴグラム（自我状態のモデル）」を用いて政治的リーダーシップのタイプ（type）を特定化するための理論的定式化を試行する。[4] これを受けて、第二に、政治的リーダーのスキル（skill）に関するモデリングを展開する。なお、筆者はこうした研究をミクロ国際政治理論における「政治的決定作成者」に関する議論の研究領域の一つとして位置付けていることを付言しておく。

2　第一次的要素による政治的リーダーシップのタイプのモデリング

(1)　第一次的要素と第二次的要素

ところで、政治的リーダーの資質を構成する要素には、当該リーダーが生まれながらに有している第一次的または先天的（inherent or natural）な要素と、彼もしくは彼女が成長していく過程で獲得する第二次的または後天的（acquired or posteriority）な要素の二種類があると考えられる。[5] 前者は、政治的リーダーシップのタイプを特定化する要素であり、後者は、政治的リーダーのスキルを構成する要素である。

すなわち、ここでこれまでの議論をまとめておくと、まず、PLを政治的リーダーシップ、Bを政治的リーダーの行動的要素、Tを当該人物の政治的リーダーとしての資質的要素とすれば、

$$PL=B+T$$

と表記できる。次に、PLTを政治的リーダーシップのタイプを特定化する要素とし、PLSを政治的リーダーのスキルを構成する要素とすれば、

$$T=PLT+PLS \qquad (2\text{-}1)$$

と表記できる。さらに、右記（2-1）を分解し、Nを政治的リーダーの先天的な要素、Aを政治的リーダーの後天的な要素とすれば、Tである政治的リーダーの資質的な要素は、

$$PLT = f(N) \quad (2\text{-}2)$$

$$PLS = f(A) \quad (2\text{-}3)$$

という連立方程式で表記することができる。

本稿では、まず、これら二つの政治的リーダーの資質の中で、その第一次的要素を表す右記（2-2）について検討する。これは当該政治的リーダーが生まれながらに有する先天的な要素であるがゆえに、本人の努力によってなかなか変えることが困難なものであり、また、これによって当該政治的リーダーのリーダーシップのタイプが決定されることから、それが時代状況や環境的条件に適合性を有する政治的リーダーと成り得るか否かが判定できるという意味で、決定的に重要な要素である。しかる後に、第二次的要素を表す右記（2-3）について検討する。

（2）自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定化

ところで、政治的リーダーは、この第一次的要素の種類により、「創造型リーダー（Creative Leader）」、「管理型リーダー（Administrative or Managerial Leader）」、「象徴型リーダー（Symbolic Leader）」の三つのタイプに分類することができる。[6] ここで、創造型リーダーとは、新規の制度開発や国家社会の建設に自己の能力を発揮するタイプである。また、管理型リーダーとは、既存の制度運用や国家社会の効率的運営に自己の能力を発揮するタイプである。さらに、象徴型リーダーとは、確固とした基盤を有する成熟した国家や社会において、伝統的な価値観や国民の忠誠心を確立する過程でその存在が効果を発揮するタイプである。

こうした政治的リーダーの三つのタイプは、精神分析や社会心理学における交流分析の自我状態の構造モデルたる「子供（Child）」、「大人（Adult）」、「親（Parent）」という人間の三つの性格要素にそれぞれ該当すると考えられる。[7] なぜなら、創造性の要素とは、将来のある子供が自己および他者に対して理想や夢を抱く感性と密接な関連を有するものだからであり、管理性の要素とは、成熟した大人が自己および他者ならびに周囲の環境を安定的かつ効率的に整備する感性と密接な関連を有するものだからであり、象徴性の要素とは、親が自己の保護下にある他者からの信頼の基盤として存在する感性と密接な関連を有するものだからである。したがって、当該政治的リーダーがいかなる種類のリーダーシップを発揮するタイプであるかは、エゴグラムによって判別することが可能である。

また、一人の人間がこれら三つの要素をさまざまな割合で組み合わせた人格を有するのと同様にして、一人の政治的リーダーは、こうした三つの要素をさまざまな割合で組み合わせた性格を同時的に併せ持っている。ただし、それぞれのタイプの政治的リーダーは、他のタイプの要素をも同時的に併せ持つが、自己のタイプの要素をとりわけ最も多く持っていると考えるのが素直であろう。

ここで、正確を期すために定式化をしておくと、

$$N = f(C,M,S) = a(C) + b(M) + c(S) \qquad (2\text{-}4)$$

となる。(2-4) を「政治的リーダーシップ（タイプ）関数・その1」とする。ただし、Nは先ほどと同様に先天的要素の総計であり、以下、Cは創造的要素、Mは管理的要素、Sは象徴的要素を表している。また、係数a、

b、cは、それぞれの要素が当該政治的リーダーの人格の中で占める割合を表しており、これは既述のエゴグラム分析によって判別することができることは既に指摘した。よって、必然的にこの方程式には、

$$a+b+c=1$$

という条件が必要となる。また、各リーダーシップのタイプは、

Cタイプ：$a>c>b$，$a>(c+b)$
Mタイプ：$b>c>a$，$b>(c+a)$
Sタイプ：$c>b>a$，$c>(b+a)$

という条件によってそれぞれ定義されることになる。(8)

なお、これら三つの政治的リーダーのタイプは、あくまでもそれぞれの政治的リーダーの資質を類型化したものであり、決してその優劣を意味する概念ではない。また、どのタイプの政治的リーダーが当該政治的リーダーにふさわしいかは、当該国家や当該社会が置かれている時代状況や国際関係などの環境的要素に依存する。そのような環境と合わないタイプのリーダーが輩出すると、当該国家や当該社会に適性のない政治的リーダーシップの歪みに由来するさまざまな弊害が噴出する。(9)

また、創造型リーダーが国家や社会の建設や新しい制度を設立することに適性を有するタイプであるのに対して、管理型リーダーや象徴型リーダーは、創造型リーダーによって作られた制度的枠組みをより効率的かつ安定

的に運営することに適性を有するタイプである。したがって、これらの三つの政治的リーダーのタイプは、国家や社会の発展段階としての建設期または再構築期、発展期、成熟期にそれぞれ適性を持った政治的リーダーの種類であり、したがって、それが継承される順序は、C型、M型、S型の順であることが自然といえる。

なお、いわゆる「複合的相互依存（Complex Interdependence）」が拡大・深化した状況にある今日の国際関係においては、国際情勢は覇権国の覇権体制（hegemony）が盛衰するステージと連関している。したがって、ここでは国際情勢の推移を覇権国の覇権力盛衰の諸段階（覇権の交代期または再構築期、発展期、成熟期）として認識するべきであろう。[10]

（3）自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定化

さて、前節では自我状態の構造モデルによる政治的リーダーシップの類型化を試行したが、ここでは新たに、自我状態の機能モデルを用いてこれを改訂する。[11] 機能モデルでは、従来は各一つずつ設定されていた「子供」と「親」の要素がそれぞれ分化し、構造モデルにおける三つの性格要素による分析に対して、より多く五つの性格要素によって分析がなされるように変容している。

まず、「自由な子供（Free Child）」であり、これは子供が有する気質のうちで、特に自由闊達でエネルギッシュな側面を念頭に置いた要素であり、本人の自主的かつ積極的な意志によって行動選択をする性格を表現している。次に、「従順な子供（Adapted Child）」であり、これは子供が有する気質のうちで、特に親をはじめとする目上の者のいうことに素直に従う側面を念頭に置いた要素であり、他者からのアドバイスや指示を率直に受け入れる行動選択をする性格を表現している。また、「厳格な親（Critical Parent）」であり、これは親が有する気質のうちで、特に子供や後輩などを厳しく指導する父親的な側面を念頭に置いた要素であり、厳格で頼りがいのあ

る男性的な行動選択をする性格を表現している。さらに、「寛容な親（Nurturing Parent）」であり、これは親が有する気質のうちで、特に子供や後輩などを優しく手ほどきして保護する母親的な側面を念頭に置いた要素であり、寛容で世話好きな女性的な行動を選択する性格を表現している。最後に、大人（Adult）は構造モデルと同様に一つの設定である。

次に、以上のような機能モデルに示された五つの性格要素を、政治的リーダーの資質を構成する諸要素に置き換えて翻訳すると、以下のようになると考えられる。

① 「自由な創造型リーダー（Free Creative Leader）」としての要素

国家が構造的な改革や新しい制度の創設などを遂行していく際の政治的リーダーには、この要素の値が高いことは必須条件である。草創期の政治的リーダーに最も必要な将来的ヴィジョンを生み出す力を多く有しているからである。しかし、度を越せば理想論ばかりを唱え、国民を景気の良いお祭り騒ぎにばかり扇動しつつ、うまくいかないとすべてを放り出す無責任なリーダーとなる可能性がある。

② 「素直な創造型リーダー（Obedient Creative Leader）」としての要素

政治的リーダーにとって最も必要不可欠な要素がこれであり、他者からの異なる意見や批判に耳を傾ける融通性と、納得すればそれを受容する素直さを有しているからである。したがって、主として民主主義的な政治過程が実現されている政治体制においては、この値が高いことは政治的リーダーの重要な要件であると考えられる。しかし、度を越せば他者の異論に右往左往して優柔不断となり、政治の混乱を招くリーダーとなる可能性がある。

③ 「管理型リーダー（Administrative Leader）」としての要素

この要素が高いことは、すでに出来あがっている体制を維持していく役割を担う政治的リーダーとしては最も

有能である。しかし、その反面、本人が有能かつ冷徹で合理的な判断を下せる能力や性格を有しているため、度が過ぎれば他者への思いやりや弱者に対する愛情が不足したリーダーとなる可能性がある。したがって、創造性のある仕事には比較的不向きであり、むしろリーダーの補佐役としての立場が似合うタイプである。政治的リーダーよりも、むしろ官僚・役人に適したタイプとしての要素が大きいといえる。

④「厳格な象徴型リーダー（Critical Symbolic Leader）」としての要素

この要素が高い値であることは、人々を引っ張っていく立場にある政治的リーダーにとってはいかなる環境においても必要である。規律と秩序を重んじる心情は、政治的リーダーが有するべき倫理性の精神を構成する要素だからである。しかし、度が過ぎれば独裁的なリーダーシップを発揮し、警察国家化を招くタイプに変容する可能性がある。

⑤「寛容な象徴型リーダー（Nurturing Symbolic Leader）」としての要素

この要素が高い値であることは、政治的リーダーにとっていかなる環境においても必要である。なぜなら、寛容と慈悲の心情は、政治的リーダーが有するべき博愛の精神を構成する要素だからである。しかし、度を越せば弱者・貧者の救済・福祉にばかり気を取られ、国家の舵取りにとって重要な現実主義的な外交や安全保障への気配りをおろそかにするリーダーとなる可能性がある。

言うまでもなく、先ほどの構造モデルの場合と同様にして、一人の人間がこれら五つの要素をさまざまな割合で組み合わせた人格を有するのと同様にして、一人の政治的リーダーは、こうした五つの要素をさまざまな割合で組み合わせた性格を同時的に併せ持っている。また、それぞれのタイプの政治的リーダーは、他のタイプの要素をも同時的に併せ持つが、自己のタイプの要素をとりわけ最も多く持っているといえる。

先ほどと同様にして、ここで正確を期すために定式化をしておく。Nを政治的リーダーシップの先天的要素の総計とし、以下、それぞれFCを自由な創造型リーダー、OCを素直な創造型リーダー、Mを管理型リーダー、CSを厳格な象徴型リーダー、NSを寛容な象徴型リーダーの各要素とすると、

$$N = f(FC, OC, M, CS, NS) = a(FC) + b(OC) + c(M) + d(CS) + e(NS) \quad (2\text{-}5)$$

となる。（2-5）を「政治的リーダーシップ（タイプ）関数・その2」とする。ただし、係数a、b、c、d、eはそれぞれの要素が人格の中で占める割合を表しており、こちらがエゴグラム分析によって判別することができることは既に指摘した。よって、必然的にこの方程式には、

$$a+b+c+d+e=1$$

という条件が必要となる。また、各リーダーシップのタイプは、

FCタイプ：$a>b>e>d>c$，　$a>(b+e+d+c)$
OCタイプ：$b>a>d>e>c$，　$b>(a+d+e+c)$
Mタイプ：　$c>d>b>e>a$，　$c>(b+d+e+a)$
CSタイプ：$d>e>c>b>a$，　$d>(e+c+b+a)$

NSタイプ：e>d>c>b>a，　e>(d+c+b+a)

という条件によって定義されることになる。

なお、ここでこうした五つの政治的リーダーのタイプを用いてその望ましい継承順序を考えると、FC型、AC型、M型、CS型、NS型の順となる。これらはそれぞれ国家や社会の建設期または再構築期、確立期、発展期、安定期、衰退期に対応する。また、やはり国際情勢の推移は覇権国の覇権力盛衰の諸段階（覇権の交代期または再構築期、確立期、発展期、安定期、衰退期）として認識するべきであろう。

注目すべきは、構造モデルに基づく三タイプと比較して、創造型リーダーと象徴型リーダーが果たすべき役割の期間がそれぞれ詳細化している点である。ここでは、「素直な創造型リーダー」というものが「自由な創造型リーダー」と「管理型リーダー」との間の中継ぎ役として、また、「厳格な象徴型リーダー」というものが「管理型リーダー」と「寛容な象徴型リーダー」との間の中継ぎ役として、それぞれ有効かつ旺盛なる能力を発揮するタイプの政治的リーダーであることを示していると解釈できる。(12)

3　第二次的要素による政治的リーダーシップのモデリング

(1)　第二次的要素としての知性と徳性

前章における政治的リーダーシップのタイプの特定化に関する議論を受けて、本章では、政治的リーダーの資質を構成する第二次的な要素である「知性（intellect）」と「徳性（virtue）」について検討する。これらの要素は、政治的リーダーのスキルを構成する要素であり、いわゆる政治的リーダーシップの技量を表す概念として解

釈できる。また、当該政治的リーダーが成長する過程で獲得していく後天的な要素であるがゆえに、本人の努力によってその多くを培うことができるものであり、逆にいえば、本人の努力なしには培うことができにくいものである。

すなわち、ここでいう「知性」とは、当該リーダーが成長していく過程で獲得する知識や技術のことである。特に政治的リーダーの場合には、政治家としての職務遂行に必要な社会効率に関する知識、すなわち、集団統制の技量、問題認識の能力、政策立案の才能、論理的思考の力量、自説主張の表現力などが該当する。こうした能力は、主として社会科学および自然科学の学問的訓練とともに、社会経験や家庭環境などの要因によって育成される。

同様にして、ここでいう「徳性」とは、当該リーダーが成長していく過程で身に付ける仁徳や人格のことである。特に政治的リーダーの場合には、政治家としての職務に携わる者に必要な社会正義に関する倫理感、すなわち、感情抑制の理性、社会的厚生の観念、弱者救済の理念、慈悲博愛の精神、自己犠牲の意識などが該当する。こうした能力は、主として社会科学および人文科学の学問的訓練とともに、やはり「知性」の場合と同様にして、社会経験や家庭環境などによって育成される。

やはり正確を期すために以上の議論を定式化しておくと、まず、Aを政治的リーダーの後天的要素の総計、Iを政治的リーダーの知性的要素、Vを政治的リーダーの徳性要素とし、IとVは相互に影響を及ぼさない独立した変数だと仮定すれば、

$$A = f(I, V) \qquad (3\text{-}1)$$

という関数を設定できる。この（3-1）を「政治的リーダーシップ（スキル）関数」とする。

（2）政治的リーダーシップの第二次的要素の極大化

ところで、ここで取り上げている知性と徳性という要素は、当該政治的リーダーの努力によって一定限度まで増大させることが可能であるが、それには限界があり、ゆえに、それは「最大値」ならぬ「極大値」を取る曲面として数学的に定式化することができる（図1参照）。

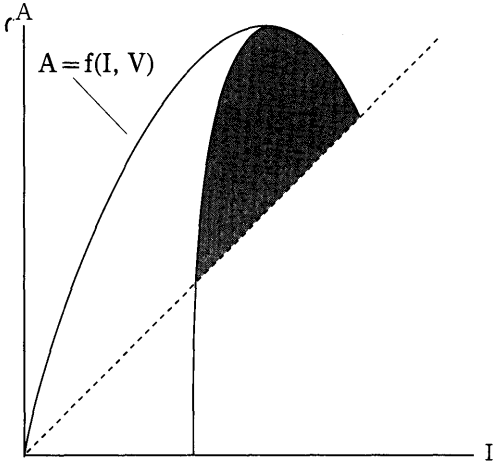
そこで、再び正確を期すために、Iを政治的リーダーの知性的要素、Vを政治的リーダーの徳性的要素として、これらの諸要素の関係をミクロ経済学の理論における標準的な「生産関数」にならって特定化して表すとすれば、[13]

$$A = f(I, V) = I^{a} \cdot V^{b} \qquad (3\text{-}2)$$

となる。この関数を偏微分すれば、

$$A' = \frac{\partial A}{\partial I} = V^{b} \cdot aI^{a-1}$$

図1　政治的リーダーシップ（スキル）関数の図式化



$$A' = \frac{\partial A}{\partial V} = I^a \cdot bV^{b-1}$$

となる。よって、極大または極小の条件は、

$$aI^{a-1} \cdot V^b = 0 \qquad (3\text{–}3)$$

$$bV^{b-1} \cdot I^a = 0 \qquad (3\text{–}4)$$

となり、上記（3–3）および（3–4）が同時成立することとなる。既に述べたように、ここでは極大値を有する凸型の曲面を想定しているため、以上の議論をより一般的に定式化しつつ、今度は極大と極小のいずれかを判別する基準を導出する。まず、上式（3–3）（3–4）を意味する $\partial/\partial I$ および $\partial/\partial V$（1階のIおよびVの偏導関数）を、さらにもう一度IとVについて偏微分すると、

$$\frac{\partial}{\partial I}\left(\frac{\partial A}{\partial I}\right) \text{または} \frac{\partial^2 A}{\partial I^2}$$

$$\frac{\partial}{\partial V}\left(\frac{\partial A}{\partial I}\right) \text{または} \frac{\partial^2 A}{\partial V \partial I} \qquad (3\text{–}5)$$

$$\frac{\partial}{\partial I}\left(\frac{\partial A}{\partial V}\right) \text{または} \frac{\partial^2 A}{\partial V \partial I}$$

$$\frac{\partial}{\partial V}\left(\frac{\partial A}{\partial V}\right) \text{または} \frac{\partial^2 A}{\partial V^2} \qquad (3\text{–}6)$$

となる。これらの2階の偏導関数のうちで（3–5）と（3–6）は交差導関数であるから、もし両者が連続であれ

ば、

$$\frac{\partial^2 A}{\partial V \partial I} = \frac{\partial^2 A}{\partial V \partial I}$$

が成立し（いわゆる「ヤングの定理」）、極大または極小の判別が可能となる。まず、極大条件は、

$$\frac{\partial^2 A}{\partial I^2} < 0 \text{ かつ } \frac{\partial^2 A}{\partial V^2} < 0 \qquad (3\text{-}7)$$

次に、極小条件は、

$$\frac{\partial^2 A}{\partial I^2} > 0 \text{ かつ } \frac{\partial^2 A}{\partial V^2} > 0 \qquad (3\text{-}8)$$

となる。これに、極値条件としての下記を加えれば、それが単に変曲点ではなく極点であることが証明されることになる。つまり、

$$\frac{\partial^2 A}{\partial I^2} \cdot \frac{\partial^2 A}{\partial V^2} > \left(\frac{\partial}{\partial V} \left(\frac{\partial A}{\partial I} \right) \right)^2 \qquad (3\text{-}9)$$

であり、上式（3-7）（3-8）（3-9）の同時成立が極大または極小の条件となる。[14]

（3） 制約条件を付加したモデル

ところで、知性や徳性などの要素は、政治的リーダーの年齢（age）や収入（income）などといった諸要因による制約を受けることが予想される。なぜなら、知性や徳性の大きさは、当該政治的リーダーの年齢の経過や教育機会の拡大などとともに変化するものであり、これらは費用（cost）ともいうべき要素だからである。[15] すなわち、もし当該政治的リーダーが「合理的行為者」であると仮定すれば、知性I、徳性Vの二つのスキル要素をできるだけ少ない費用で可能な限り増加させる努力をすることになろう。さらに、政治的リーダーに限らず、社会的動物である人間がこうしたスキル要素を身に付けるためには、時間・学習・経験などの相応の費用がかかるため、それらは収入によって制約される要素と考えられる。したがって、ここでは目的関数を政治的リーダーシップ（スキル）関数とし、制約条件を費用関数とする「ラグランジュ未定乗数法」にならった最大化問題を設定することができる。

そこで、Iを知性的要素、Vを徳性的要素、Cを総費用、γを知性増大のための費用、ωを徳性増大のための費用とし、IとVは相互に独立した変数だと仮定すれば、

目的関数　$A=f(I, V)$

制約条件　$C=\gamma I+\omega V$

となり、ここで上記の制約条件の式を操作して、

$$C-\gamma I-\omega V=0$$

とする。そうすれば、

$$\Lambda = f(I, V) + \lambda(C - \gamma I - \omega V)$$

の形式のラグランジュ関数を設定できる。これをI、V、λでそれぞれ偏微分すると（Cは総費用のため定数扱い）、各偏導関数は、

$$\frac{\partial \Lambda}{\partial I} = \frac{\partial f}{\partial I} - \lambda\gamma \quad (3\text{–}10)$$

$$\frac{\partial \Lambda}{\partial V} = \frac{\partial f}{\partial V} - \lambda\omega \quad (3\text{–}11)$$

$$\frac{\partial \Lambda}{\partial \lambda} = C - \gamma I - \omega V \quad (3\text{–}12)$$

となる。ちなみに、ここではより一般的な議論を想定しているゆえにリーダーシップ（スキル）関数を特定化していないため、費用1単位あたりを増加させた場合の知性の増加分と徳性の増加分をそれぞれ、

$$fi = \frac{\partial f}{\partial I} \quad (3\text{–}13)$$

$$fv = \frac{\partial f}{\partial V} \quad (3\text{–}14)$$

とおけば（経済学的な用語でいえば限界的な増分であり、いわゆる限界生産力）、あとは右記（3-13）（3-14）の各式を右記（3-10）（3-11）（3-12）の各式に代入して左記（3-15）（3-16）（3-17）を得た上で、この連立方程式を解けば良い。

$$fi - \lambda\gamma = 0 \qquad (3\text{-}15)$$

$$fv - \lambda\omega = 0 \qquad (3\text{-}16)$$

$$C - \gamma I - \omega V = 0 \qquad (3\text{-}17)$$

以上の操作の結果、左記（3-18）が得られる。

$$\lambda = \frac{fi}{\gamma} = \frac{fv}{\omega} \qquad (3\text{-}18)$$

これによって、λと知性や徳性の限界的な増加分およびそれらの各費用について（3-18）が成り立つ。したがって、（3-18）および（3-17）が制約付き最大化の条件となる。さらに、もしも知性や徳性を構成する要素の種類が多数であり、その数量を $q_1, q_2, \cdots\cdots, q_n$、その費用を $c_1, c_2, \cdots\cdots, c_n$ とすれば、政治的リーダーシップ（スキル）関数は、

$$PLS = f(q_1, q_2, \cdots\cdots, q_n)$$

となり、ここで各要素の限界的な増加分を$f_1, f_2, \cdots\cdots, f_n$とすれば、

$$\lambda = \frac{f_1}{C_1} = \frac{f_2}{C_2} = \cdots\cdots \frac{f_n}{C_n}$$

が成立することになる。

4 結論

①政治的リーダーシップの研究は、資質論的アプローチと行動論的アプローチを統合する方向でなされる必要があり、特にそれは人間行動の源泉であるところの資質分析に帰着する。

②政治的リーダーの資質には、当該リーダーが第一次的（先天的）に有する要素と、第二次的（後天的）に獲得する要素の二つの種類がある。

③第一次的要素について、自我状態の構造モデルの考え方に基づけば、政治的リーダーには、創造型、管理型、象徴型の三つの種類があり、どのタイプがリーダーにふさわしいかは当該リーダーを取り巻く環境がいかなる状況にあるかに依存する。

④自我状態の機能モデルの考え方を加味すると、政治的リーダーの種類は、自由な創造型、素直な創造型、管理型、厳格な象徴型、寛容な象徴型の五つに類型化が可能であり、その連携の順序はやはり当該リーダーを取り巻く環境に依存する。

⑤第二次的要素から考えると、政治的リーダーが後天的に獲得する要素には知性と徳性の二つの種類がある。これらの要素は、第一次的要素が当該政治的リーダーの努力によって変化しにくいものであるのに対して、本人の努力によって育成することが可能な要素ではあるが、それには限界があり、特に年齢や教育機会などの費用によってそれぞれ制約を受ける。

加えて、本稿の議論には、①リーダーの資質を構成する各要素の取捨選択とその内容の検討および概念規定をすること、②リーダーの資質を構成する各要素の数量化を試行すること、③リーダーの資質を構成する各要素間の相互作用と重複効果（いわゆる多重共線性）の問題を検討することなどの課題がある。(16)

（1）資質論的アプローチは、元来は歴史上の偉大な政治家や皇帝などの統治者を研究することから始まっているため、別名で「偉人理論（Great-Man Theory）」とも呼ばれている。たとえば、歴史的名著ともいうべきN・マキアヴェッリ（河島英昭訳）『君主論』（岩波書店、一九九八年）などは、あまりにも有名である。

（2）資質論的アプローチの代表的な業績として、岡義武『近代日本の政治家』（岩波現代文庫、二〇〇一年）、塚田富治『近代イギリス政治家列伝・彼らは我らの同時代人』（みすず書房、二〇〇一年）、田尾雅夫『組織の心理学（新版）』（有斐閣ブックス、一九九九年）、石井貫太郎（編）『開発途上国の政治的リーダーたち』（ミネルヴァ書房、二〇〇五年）、石井貫太郎（編）『現代世界の女性リーダーたち』（ミネルヴァ書房、二〇〇八年）、J・S・ナイ・Jr.（北沢格訳）『リーダーパワー・21世紀型組織の主導者のために』（日本経済新聞社、二〇〇八年）、J. Blondel, *Political Leadership*: Towards a General Analysis, Sage Publishers, 1987, H. J. Elcock, *Political Leadership*: New Horizon in Public Policy, Edward Elgar Publishers, 2001, F. E. Ghiselli, "The Varidity of Management Traits Related to Occupational Level", *Personal Psychology*, No. 16, pp.109–113, R. J. House and M. L. Baetz, "Leadership: Some Empirical Generations and New Research Directions", *Organizational Behavior*, No.1, 1979, pp.341–423, D. K. Simonton, *Why Presidents Succeed?*: A Political Psychology of Leadership, Yale University

Press, 1987 などが挙げられる。また、行動論的アプローチの代表的な業績として、三隅二不二『リーダーシップ行動の科学（改訂版）』（有斐閣、一九八四年）、J. Misumi, *The Behavioral Science of Leadership*: An Interdisciplinary Japanese Research Program, University of Michigan Press, 1985, R・R・ブレーク、J・S・ムートン（田中敏夫・小宮山澄子訳）『新・期待される管理者像』（産業能率大学出版部、一九七九年）、R. R. Blake, and J. S. Mouton, *The Managerial Grid*, Gulf Publish Co., 1994, R. R. Blake, and A. A. McCanse, *Leadership Dilemmas*: Grid Solutions, Taylor Wilson Publisher, 1991, C. L. Bovee, J. V. Thill, M. B. Wood and G. P. Dovel, *Management*, McGraw-Hill, 1993, P・H・ハーシー、K・H・ブランチャード（山本成二・水野基・成田攻訳）『行動科学の展開・人的資源の活用』（日本生産性本部、一九七八年）、P. Hersey, and K. H. Blanchard, *Management of Organizational Behavior*: Utilizing Human Resources, Prentice-Hall, 1988, R・リッカート（三隅二不二訳）『経営の行動科学』（ダイヤモンド社、一九六四年）、K・レヴィン（猪俣佐登留訳）『社会科学における場の理論』（誠信書房、一九七二年）、R. A. Johnson, R. J. Morsen, H. P. Knowles and B. O. Saxberg, *Systems and Society*: An Introduction, Goodyear Publishing, 1976, G. A. Yukl, *Leadership in Organizations*, Prentice-Hall, 1981 などが挙げられる。特に、政治的リーダーシップの科学的分析については、河田潤一・荒木義修（共編）『ハンドブック政治心理学』（北樹出版、二〇〇三年）、O・フェルドマン『政治心理学』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）、石井貫太郎『リーダーシップの政治学』（東信堂、二〇〇四年）、R. C. Ziller, W. F. Stone, R. M. Jackson and N. J. Terbovic, "Self-Other Orientation and Political Behavior", in M. G. Hermann, *A Psychological Examination of Political Leaders*, Free Press, 1977 などがある。特に、国際政治学のミクロ理論（外交政策論）における数々の業績を遺した大御所の手によるG. D. Paige, *The Scientific Study of Political Leadership*, Free Press, 1977 は、本稿の議論の先駆的業績ともいえる。なお、これらの業績のサーベイについては、石井（二〇〇四）（前掲書）第1章～第3章（一四―四〇頁）などに詳しい。

(3) 国家のリーダーとしての政治家と、官僚や経営者などの他の組織のリーダーたちとの相違や差異に関する議論は、石井（二〇〇四）（前掲書）四六―四八頁を参照。

(4) エゴグラムに関する議論の詳細については、「政治的リーダーの資質に関する政治心理学的アプローチ・エゴグ

ラム分析の応用試論」『目白大学人文学研究』第五号（八五九九頁）二〇〇九年所収を参照。同稿は、被験者としての対象自身の回答に頼らず、周囲の人間が客観的に被験者を分析できる手法の一例としての意義を持つ。また、エゴグラムの原典としては、「交流分析（TA: Transactional Analysis）」の開祖であったE・バーン（南博訳）『人生ゲーム入門（新装版）』（河出書房新社、一九九四年）、その弟子でエゴグラムを発明したJ・M・デュセイ（池見酉次郎監修・新里里春訳）『エゴグラム』（創元社、一九八〇年）、M・M・グールディング、R・L・グールディング（深見道子訳）『自己実現への再決断』（星和書店、一九八〇年）、客観的分析手法としての質問紙法を開発したN. R. Heyer, "Development of a Questionaire to Measure Ego States with Some Applications to Social and Comparative Psytiatry", *TAJ*, No. 9, pp.9–19, 1979, N. R. Heyer, "Empirical Research on Ego State Theory", *TAJ*, No. 11, pp.286–293, 1987, I・スチュアート、V・ジョーンズ（深見道子監訳）『TA TODAY』（実務教育出版、一九九一年）、岩井浩一・杉山薫「質問紙法エゴグラムの臨床的応用」『交流分析研究』第二巻一号（三―一三頁）一九九三年所収などがある。なお、我が国の企業において広くビジネスマンの心身健康管理に適用されたことで有名な東京大学医学部心療内科（編）『新版エゴグラム・パターン・TEG（東大式エゴグラム）第二版による性格分析』（金子書房、一九九三年）と東京大学医学部心療内科（編）『新版TEGⅡ・解説とエゴグラム・パターン』（金子書房、二〇〇六年）はあまりにも有名である。

(5) 後天的要素の拡充によって先天的要素が変化する可能性は、現代では微少であると考えられている。しかし、当該人物の行動を変化させることは可能であり、それゆえ資質論的アプローチは「特定の要素を有する人物のみがリーダーとなれる意義を論じた差別主義的な理論」であり、行動論的アプローチは「だれもがリーダーになれる可能性を論じた平等で夢のある理論」とのイメージが大衆民主主義の拡大と深化に伴って広く流布したが、これは本末転倒な認識である。なぜなら、行動が変わることと性格が変わることはまったくの別問題だからである。石井（二〇〇四）（前掲書）一九頁参照。他に、G・ベッカー（佐野陽子訳）『人的資本・教育を中心とした理論的経験的分析』（東洋経済新報社、一九七六年）など。

(6) 政治的リーダーを類型化する試みは多数試行されているが、そのほとんどが三類型であることはよく知られている。石井（二〇〇四）（前掲書）五一―五四頁参照。

(7) いわゆる交流分析の開祖であるバーンの弟子であったデュセイ（一九八〇）などの議論が念頭に置かれている。

(8) 数理モデルについては、A・C・チャン（大住栄治訳）『現代経済学の数学基礎（上・下）』（CAP出版、一九九五―一九九六年）、A. C. Chiang, and K. Wainwright, *Fundamental Methods of Mathmatical Economics*, McGraw-Hill, 2005, A・J・ドブソン（田中豊訳）『一般線型モデル入門』（共立出版、二〇〇八年）、J. A. Dobson, *An introduction to Statistical Modelling*, Kluwer Academic Publishers, 1983, E. T Dowling, *Schaum's Outline of Theory and Problems of Introduction to Mathmatical Economics*, McGraw-Hill, 1992, Simon, C. P. and L. Blume, *Mathmatics for Economists*, W. W. Norton & Co. Inc., 1994, 薬師寺泰蔵「政策分析におけるモデリングの諸問題」日本政治学会編『政策科学と政治学』（岩波書店、一九八三年）所収、薬師寺泰蔵・榊原英資『社会科学における理論と現実・実証分析における一つの試論』（日本経済新聞社、一九八〇年）などを参照。

(9) たとえば、国際環境や国家体制が発展期にある時は、既存の枠組みの効率性を向上させるために管理型リーダー（Mタイプ）がリーダーシップを執る適性があるが、この時に創造型リーダーや象徴型リーダーが登場すると、必要以上に国民の危機感を煽る（Cタイプ）、むやみに国民に安心感を与えてしまう（Sタイプ）など、急進主義や楽観主義などの不適切な政策を施行する可能性がある。それは効率性を阻害し、当該国家の発展を蝕む結果を導出することになる。石井（二〇〇四）（前掲書）の第六章（六五―八六頁）で遂行されている事例研究を見よ。

(10) マクロ国際政治理論の覇権安定論に関する詳細については、石井貫太郎『現代国際政治理論（増補改訂版）』（〃ネルヴァ書房、二〇〇三年）第二章（特に六五―七三頁）などを参照。原典としては、R. Gilpin, *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, 1981 などがある。

(11) エゴグラムの最新の研究成果である東京大学医学部心療内科（一九九三）（前掲書）や東京大学医学部心療内科（二〇〇六）（前掲書）における議論が念頭に置かれている。

(12) 各段階は厳密に区別することは不可能であり、それゆえ前後の段階の状況が錯綜する局面が存在するため、「中継ぎ役」の要素を有する政治的リーダーの役割は重要である。

(13) 生産関数の議論については、D. L. Bosworth, *Productions Functions*: Theoretical and Empirical Study, Ashgate, 1976 などに詳しい。

(14) 経済理論における「極大化」という表現は、基礎的かつ標準的な経済数学のテキストにおいて頻繁に見受けられる。たとえば、E・ドゥリング（大住栄治・川島康男訳）『例題で学ぶ入門経済数学（上・下）』（CAP出版、一九九六年）など。

(15) 他にも、政治的リーダーの「出身階層（birth）」などの要素が考えられる。というのは、歴史的な諸事例によれば、偉大な足跡を遺した政治的リーダーたちの多くは「中間階級（middle class）」の出身者であり、上層階級や下層階級を出自とする人物は稀少であることが確認されている。たとえば、石井（二〇〇五）（前掲書）で取り上げられている諸人物を見よ。

(16) 従属変数（被説明変数）の説明要因としての独立変数（説明変数）間の相乗効果が個々の変数の自律的な作用以上の影響を与えることを意味する統計学用語である。